

建築主：兵庫県
 設計者：安藤忠雄建築研究所
 ：木村俊彦構造設計事務所
 ：金箱構造設計事務所
 施工者：株式会社 大林組

岸本勝也
 安藤忠雄
 木村俊彦
 金箱温春
 小林英博



建物外観（撮影：松岡満男）

建築概要

建設地：兵庫県神戸市中央区脇浜海岸通1-1
 建築主：兵庫県 建築設計：安藤忠雄建築研究所
 構造設計：木村俊彦構造設計事務所、金箱構造設計事務所
 設備設計：森村設計
 施工：大林・清水・鴻池・神鋼興産建設・明和・山田特別共同企業体
 竣工：2001年9月
 建築面積：13,807.31㎡ 延床面積：27,461.41㎡
 階数：地上4階、地下1階、高さ：23,677m
 構造種別：SRC造一部RC造

選評

震災復興のシンボルとして兵庫県南部地震の震源地近くに計画された西日本最大の美術館である。隣接する水際広場やハーバーウォークとの動線の繋がりがや屋外展示スペースの有効利用など周辺と一体化となった「開かれた美術館」となっている。

さらに、1、2階の御影石に覆われた基壇の上に3、4階のガラスに包まれた3棟のコンクリートボックスを載せ、大きな庇で覆われた姿はダイナミックで印象的である。最近の美術館建築では建物や収蔵品の安全確保の目的で免震構造を採用することが多くなってきている。

この美術館でもその目的で採用されていますが、さらに免震構造のメリットを生かして、分棟や吹き抜けなどによる複雑な空間構成の実現と建物上部に象徴的に設けられたコンクリート庇（プレキャストコンクリート板）のダイナミックな形態の実現へと発展されている。

また、周辺からのアプローチ部分にあるエキスパンションは不自然さを感じさせないきめ細かなディテールとなっている。

ともかく、来訪者に芸術性の高い雰囲気を感じさせる建築作品となっており、免震構造を採用した美術館の重要な事例と考え、第5回免震構造協会賞・作品賞に値するものとする。
 （石原 直次）

免震化した経緯及び企画設計等

この美術館の前身である兵庫県立近代美術館は兵庫県南部地震において大破し、多くの収蔵品も被害を受けた。また、敷地は激震地に近く、隣接地には震災復興事業の一環として防災広場が作られた。このような背景のもとで、復興のシンボルとして西日本最大規模の美術館が企画された。設計プロポーザルにおいて免震構造の採用を提案し、建物の安全確保と収蔵品の保護を意図した。

開かれた美術館となることを目指し、屋外展示スペースを有効に利用して、隣接する「なぎさ公園」やハーバーウォークなどにも自由に往来できる動線を確保し、これらと一体化を計って立体的な広場を作り出すこともテーマであった。

技術の創意工夫、新規性及び強調すべき内容等

建物は1、2階を御影石に覆われた基壇部分とし、その上部の3、4階にコンクリートの箱を内包したガラスの箱が載せられており、地下1階と1階の間に免震層を配した中間層免震である。本建物の上部構造は壁が多いものの、分棟や吹き抜けなどにより空間の形態が複雑となっており、また建物上部の象徴的なPC大庇や石張りの独立壁など、大胆なデザインを採用している。免震構造の採用により、上部構造を弾性限界範囲に留めることで地震時の挙動を明確にし、安全性を確保した。

建物と周囲との関係が多様多様であり、エキスパンションのディテールが多様なことも特徴である。出入口、大階段、スロープなどさまざまなアプローチが作られ、それぞれの部位で工夫を凝らし立体的なエキスパンションを構築している。



建物外観（展示室の間の立体的な広場）（撮影：松岡満男）

